
心研！

風斬速斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心研！

【Nコード】

N9926P

【作者名】

風斬速斗

【あらすじ】

二次元美少女を愛している男子生徒はある日その部室に連れて行かれた。自分のことを神だと本気で思っている（漢字が致命的な）帰国子女や、相手にいじめられてからいじめ返したい（またはいじめてからいじめられたい）見た目だけ大和撫子に、人体に興味のある（自分で解剖して研究希望）高校生医師などその部にはぶっ飛んだ美少女が揃っていた！

その高等学校には心理学研究部しんりがくけんきゅうぶという部活がある。

名前だけ聞けば心理学を研究する部活だろう。

しかし生徒たちの話ではただ心理学の研究をするだけではなさそうだ。

二年生の美少女三人が集まっている部活だが、その三人は変わっている。

入部を希望した生徒がその翌日には心身ともに深い傷を負って帰ってきた。

全員学校の評価がいいので教師は誰も逆らえない。むしろ弱みを握られてる。

一例ではあるが心理学研究部、通称心研しんけんについての噂は挙げるときりがないので実際にその活動を見てみよう。

学校の二階、一年前まで校長室と書かれていたプレートは外され、心理学研究部と書いたプレートに変えられている。

その中では三人の女子生徒が一人の男子生徒と言い争っているところだ。

テーブルに肘を付き、男子生徒の左隣りに座る少女が口を開いた。真っすぐに伸びた長い黒髪で、和服を着たら似合いそうな美少女だ。

「ねね、早く恍惚しんごうな表情を浮かべて私を罵ののしってよ。鞭とかでもいいけど。その後あんたが泣いて謝るまで素足で踏んであげるから」

見た目は大和撫子なのに口を開けば自分の性癖全開で残念過ぎる妄想しているのか目は虚うつろで、口を少しだけ開き涎を垂らしていた。次に聞こえた声は男子生徒の右隣りに座るポニーテールの女子生徒だ。

制服の上に所々赤黒い染みの付いた白衣を着ている。

「あなたの脳を研究したいのです。早く頭を開いて見せてください。

なんなら私が開いて差し上げましょうか」

どこからか取り出した包丁を握り、鼻息を荒くし血走った目で男子生徒を見る。

放っておけばこの部室が真っ赤に染まりそうだ。

それを見かねた男子生徒の正面に座っている金髪碧眼の女子生徒が彼女を制止する。

包丁を納めたのを確認すると男子生徒に向き直り、入部届けを掲げこう言った。

「さあ、全知全能の神であるわたしが君にチャンスをあげているのよ？ この……えーっと、はいるに……これはぶでしょ？ それから……け？ と、とにかく君はこのはいるぶなんとかけに名前を書けばいいのよ！」

「残念ながらそれは入部届けです」

「あーっ！ そうそれ！ まあ全てを統べる神である私が愚民に学ぶ機会を与えたんだけどねっ」

ちなみにこの学校は県下有数の進学校である。

三人の言葉を聞き終わると、男子生徒が三人を睨みながら言い放つ。

「ふざけるな！ オレは二次元美少女以外に微塵も興味が無い！ 頼みがあるならば美少女に生まれ変わってからにするんだな！」

なんとも力オスな空間である。この状況が生まれるまで、時は少し遡る。

二年生に進級してから最初のホームルームは自己紹介だった。担任である先生が生徒の反対も無視して自己紹介の内容に『異性の好みのタイプ』を入れるから話がややこしくなったのだ。

当たり障りのない普通の自己紹介をしている中、この男だけは違
った。

「それでは出席番号七番」

女性特有の高い声に反応して男子生徒が立ち上がると、生徒たち
が少しざわついた。

しかしそれも一瞬だけである。

いぶされんじよう

「伊武早連城、異性の好みのタイプは二次元美少女、これしかあり
えません！ さらに見た目は美少女、中身は自分と同じ年希望！
許せる追加属性は妹のみだ。それ以外は邪道！」

教室中が鎮まった。

ほとんど顔が引き攣っている。

連城本人は言いたいことが言えて満足したのか、席に座ると机に
突っ伏し眠り始めた。

そのため連城と同じくらいインパクトのある自己紹介をした三人
がいることを知る由もない。

そしてその三人に目を付けられたことも。

それから授業を受けて昼休み、隠そうともせず表紙に美少女の描
かれたラノベを読みつつ、昼食の菓子パンを食べていた。

もちろんあの自己紹介の後彼と友達になろうなんて物好きはいな
かったので一人で食べている。これは去年からそうなので本人も気
にしていなかった。

時折顔がにやけてしまいが止められない。

「むぐつ?!」

いきなり背後から口にハンカチを当てられたかと思うと急に眠く
なってきた。

「ごめんなさいね。私からいじめるのは好きだけど相手がいじめ返
してくれないのよね。だから再起して私をいじめてね？」

そんなわけのわからない言葉を最後に連城の意識は途切れ、気づ
けば心研の部室にいたのだ。

ここで時は戻る。

「……ところでお前たちは誰だ？」

「あゝ、そういえば自己紹介がまだだっけ。私は攻母受こうぼうけでゝすっ」
黒髪美少女、もとい攻母受は右手を上げ高らかに自分の名前を告げた。

次いで白衣を着たポニーテールの少女が名乗った。

「九貝椎くがいしいです。一応医師免許は持ってますので安心してください」
高校生が医師免許を持っているなど信じられないしどうしても安心できない。

鼻息は収まっているが鼻血もちゃんと拭いてほしかった。

最後に金髪碧眼の少女が机に立ち上がり連城を見下ろしながら言った。

髪をかきあげる仕種も様になっている。

「そして神であるわたしこそがレイシャ・エルエル・クールラント様よ！ 君は特別にレイシャ様と崇めることを許してあげるわ！」

「崇めるつもりなど毛頭ない。一刻も早くオレを解放しろ。それに今授業中だろ」

連れてこられてからかなり時間が経っていた。部屋の時計を見ても、とつくに授業は始まっている。

しかしレイシャは大袈裟に肩を竦めると連城を指差した。

「わかってないね君。この二人は学校でトップの権力を持っていてわたしは神よ。授業を受けない程度で咎とがめられないわ」

「私たちは勉強と運動の面が優秀なので。ちなみに三人ともあなたと同じクラスです」

椎が冷静な口調で補足した。

しかし横暴であることに代わりはない。

「いくら優秀でもそんなことは許されないだろ？」

「わかってない。優秀だからこんなふざけた部活動が認められるのよ」

「おい受。心研のどこがふざけてるんだ」

「人間の心理を研究するという建前ですが実際何もしてないですか

ら否定できませんね」

「そ、そんなことないもん！」

「よし、帰らせろ」

連城は席を立ち部室を出ようとしたがドアに鍵がかかっていて開かない。

振り返るとレイシャがいやらしい笑みを浮かべて鍵を見せびらかしていた。

受と椎も徐々に迫ってくる。

こうなると連城もさすがに恐怖を感じてしまう。

「全知全能の神であるわたしが命令する。いぶ、はい？ れん…

…しろ？」

「伊武早連城だ。さっきから聞いてると自分のことを神って言うたり、お前どう考えても馬鹿だろ」

「う、うるさい！ 日本に來たばかりだから漢字に弱いだけなの！それからわたしは地球を創った神なの！」

「っゝかまゝえたっ。さあ、私を侮蔑の目で見ながらいじめてよ」

「その後は私に解剖されてください。内臓の一つや二つ無くても大丈夫ですから」

「だからオレは二次元美少女にしか興味がないんだーっ！」

その日から心理学研究部の部室は騒がしい声が響くのだった。

（後書き）

また短編書いてみました。

頭に思いついた『変わった女の子たちのラブコメ』をテーマだったのですが短編で恋愛まで行くのは無理ですねf^_^；

コメディー………になるかはイマイチわかりませんがその辺り感想頂けたら嬉しいです。

自分ではスムーズ＋楽しく書けました（ノ＞＜）ノ

連載するかは未定ですが、希望があればよろしく願います。

自分の作品に興味を持っていただけなのなら連載中の『瞳で繋がる六道輪廻』の方ものぞいてくださいww

それではゞ（*・ー・*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9926p/>

心研！

2011年1月10日17時56分発行